

# 保育者志望学生が捉えるナッジ理論を活用した 保育の環境と人間関係

○後 藤 由 美<sup>1)</sup>・山 口 直 也<sup>2)</sup>・大 森 弘 子<sup>3)</sup>

キーワード：ナッジ理論、保育者志望学生、  
保育の環境、人間関係

## I. 問題と目的

本研究では、保育者志望学生（以下、学生）が授業で学んだナッジ理論（nudge theory）を保育の環境でいかに活かせるか思考したことを明らかにする。具体的には、保育者養成校において、保育実習前後の学生のナッジ理論の捉え方を検討するため、文章完成法（SCT）を用いてデータを収集し、テキストマイニング（KH Coder）を援用した分析を行う。また、学生がナッジ理論を活用して作成した掲示物（ポスター）から保育の人間関係について論考する。

本研究で取り上げる「保育の環境」とは、幼稚園や保育所、認定こども園（以下、園）の中で子ども達が関わる人的環境（保育者や子ども）や物的環境（施設や遊具）、自然や社会の事象のことを指す。保育の環境を通して、子ども達は成長し、園では、「こうした人、物、場などの環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう…（中略）…計画的に環境を構成し、工夫して保育しなければならない」（厚生労働省，2017，6頁）<sup>1)</sup>と示され、本研究ではこの定義を支持する。また、本研究で取り上げる「人間関係」とは、領域「人間関係」

であり、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」（厚生労働省，2017，24頁）<sup>2)</sup>と示され、本研究ではこの定義を支持する。

本研究において、保育の環境で活きるナッジ理論とは、「どんな選択肢も閉ざさず、また人々の動機付けも大きく変えること無く、その行動を予測可能な方向に改める選択構造の全様相」（Thaler & Sunstein, 2008）<sup>3)</sup>と定義されている。つまり、ナッジ理論とは豊富な実例を示し、生活場面で人々の行動をより良き選択の方向へ導く戦略である。身近な活用例として、ナッジ理論に基づき床に足型マークを付けて社会的に適切な距離を伝えたり、障がいのある子ども等に可視化したイラストや表示で次に行う活動を伝えたりして成功を収めている。筆者らは、保育者養成校で学生にナッジ理論について伝え、幼児教育・保育現場での新たな実践例を積極的に生み出している。

ナッジ理論についての先行研究を探索するため、国立国会図書館のNDL-OPACを使用して、学術雑誌に掲載された論文から「ナッジ理論」のキーワード検索を行った（2023年3月23日閲覧）。その結果、合計16件の主要な先行研究を検索することができた。先行研究の中には、医歯薬学関係12件（例えば、森谷，2022<sup>4)</sup>；水野・野出，2022<sup>5)</sup>；小池，2023<sup>6)</sup>）と最も多

<sup>1)</sup> 東大阪大学短期大学部 <sup>2)</sup> せいかだい保育所 <sup>3)</sup> 京都文教大学

く、その他に食品衛生学関係1件（山口ら、2021）<sup>7)</sup>、環境工学1件（佐々木、2021）<sup>8)</sup>、実践教育学1件（上原、2021）<sup>9)</sup>、情報処理学1件（木村ら、2022）<sup>10)</sup>が報告され、少ないながらも蓄積され始めている。しかしながら、幼児教育・保育の領域において、ナッジ理論についての先行研究はあまり見当たらない。

先行研究では検出されなかったものの、ナッジ理論は幼児教育・保育現場で活用の可能性が高く、すでに幼児教育・保育現場で活用されている。例えば、当番活動を促す「当番表」や飼育当番の活動内容を明確にする仕事内容を記入した図等もそれに当たると考えられる。それらは、幼児教育・保育の場では、子ども達のやる気を促す「環境」と呼ばれ、日常的に保育室等に設置されている。このように、ナッジ理論はすでに幼児教育・保育現場で活用されているが、保育者養成校の学生は、ナッジ理論という言葉を知らず、保育の環境の中で保育実践としてナッジ理論を捉えていることが多い。

ナッジ理論とその実践状況を学生に伝え、学生がナッジ理論をどのように捉えるかを理解することは、今後の質の高い幼児教育・保育に寄与すると考えられる。そこで、学生にナッジ理論に関して伝える授業の場を設定した。この授業内容を以下に示す。

ナッジ理論は、「小さなきっかけを与えて、人々の行動を変える戦略」で、行動経済学で用いられる理論のひとつとして扱われる。相手に命令や強制をせず、コストもかけずに望む方向に相手を誘導することを「ナッジ(ヒジでちょっと突く)」と呼び、科学的に立証された手法である。シカゴ大学のリチャード・セイラー教授らが提唱、2017年ノーベル経済学賞を受賞したことから注目されることとなり、米国企業を中心に世界中に広まった。現在では、多くの企業のマーケティング戦略で利用される他、欧米

の公共政策でも使用されている。わが国においても、「ナッジ理論で伸ばす日本の健康寿命」として利用されている。例えば、がん検診に行かない理由としては、「忘れていた」「受けたい」と思っていたけれどそのままになっていた」等が考えられるが、「特定健診を受ける際に当たり前のようになん検診を受けてもらえれば、がん検診の受診率は改善」（厚生労働省、2023）<sup>11)</sup>することが示されている。「面倒だ、後で考えよう」という人に行動変容を促すのが、ナッジ理論を利用した受診勧奨だと言える。

公共政策の世界では、ナッジ理論を「リバタリアン・パターナリズム」と呼ぶこともある。リバタリアンは「自由主義」という意味で、個人的な自由、経済的な自由双方を重視する。他者の身体や正当に所有された物質的、私的財産を侵害しない限り、各人が望む全ての行動は基本的に自由という考え方である。また、パターナリズムは「家族主義・家父長主義」という意味で、親が子どものためによかれと思いつつも、本人の意思は無視して方針を決定することである。リバタリアン・パターナリズム（ナッジ理論）は、それらを融合させた考え方で、命令や強制によって相手に行動させるのではなく、自らが選択するように（背中を押すように）軽く行動を促す。ナッジ理論の原著の表紙には象の親子の絵（図1）が描かれているが、前を歩く子象のお尻を、後ろから歩く親象は鼻でそっと押している。公共政策の視点で見れば、国民の自由な選択は残しているけれど、実質は政府が望ましい方向に寄せることである。「相手を誘導する」というと、人を操りコントロールするように思えるが、ナッジ理論の特徴は「相手に選択肢がある」ところにある。たとえそれが正しくても、人は「強制」を嫌うものである。しかし、ナッジ理論を応用すると、相手は強制されたと思わずに自分で選択して行動するの

で、仕掛ける側は、相手にこちらが望む行動をとってもらえることができる。結果が出なくても批判を浴びにくい、政府にとって非常に魅力的な方法であると言える。

すでに「なんとなく選択して行動してしまう」しかけが存在し、私たちはヒジをつつかれ、背中を押されている。例えば、2020年以降、私たちの生活習慣を変容してしまったコロナ禍で、多くの場所で見かけるようになった足形マーク(図2)がある。お店の店員に言われなくても何となく、足形マークの所で並んでしまう。さらに、ナッジ理論を活用した事例を紹介する。

### ① 「男性用小便器の標的」(図3)

男性用トイレの清掃で困っていたオランダのアムステルダム・スキポール空港で、小便器の内側にハエの絵を描いたところ、清掃コストを大幅に削減することができた。人間は的があると狙いたくなる心理を利用した。結果、飛び散りを減らすことに成功した。

### ② 「たばこの吸い殻投票箱」(図4)

英国の環境保護団体が、タバコの吸い殻のポイ捨てを減らすキャンペーンで、吸い殻入れを投票箱に見立てた仕掛けである。人気投票やア

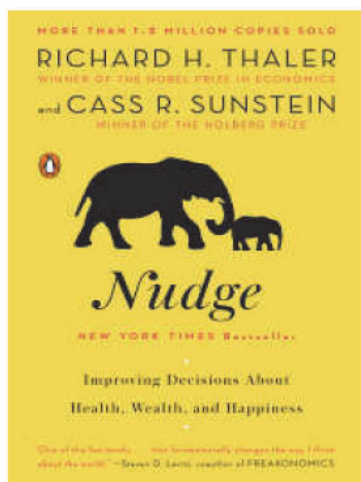


図1. ナッジ理論の原著の表紙<sup>12)</sup>



図2. 足形マーク

注) <https://www.stsnarao.com/economics/nudge-theory/> より引用



図3. 小便器の的

注) <https://tamakisono.blogspot.com/2010/10/blog-post.html> より引用



図4. 投票箱の吸い殻入れ

注) <https://predge.jp/96607/> より引用

ンケートの投票方法をタバコの吸い殻いれにしたもので、図4には「世界最高のプレイヤーはどっち？」というアンケートテーマがあり、その選択肢として、「ロナウド (Ronaldo)」と「メッシ (Messi)」の名前の直下にタバコの吸殻を入れるようになっている。この結果、街のポイ捨てが46%減少した。ただ、「ポイ捨てはやめよう」と呼びかけたり、多大な経費を掛けて街の清掃を行ったりするより効果的であった。

## Ⅱ. 保育現場でのナッジ理論の活用事例

京都府内にあるS保育所は、緩やかな丘陵地に建ち、自然環境に恵まれ、近代的な学研都市にあることで知られている。ここでは、S保育所における「保育の環境」に焦点を当てたナッジ理論の活用事例を紹介する。

### 1. ナッジ理論を活用した保育の環境

図5には、園庭で火を使った活動をする際の、おおよその環境設定を示した。火を使った活動の際は、かまどを囲うように木のベンチが置かれている。保育者がかまどの周りにベンチを並べていると、子ども達が「たき火するの?」「僕ベンチ持ってくる」等、参加したり、環境の用意をしたりする(図6)。保育者は特に誘いか

けたりはせずに、子ども達が自由に参加したり、他の遊びをしたりする。かまどを囲うベンチは普段園庭に置いており、子ども達が自由に動かして遊びに使う(図7)。

火を使った活動をする際は、ベンチでできた境界線ができると、活動に参加していない子ども達も境界線内に入る時は安全を確認しながらゆっくりと入り、境界線付近でボール遊び等をしなくなる。また、図8や図9に示すように、火を使った活動をしている子どもたちも、可燃物や火ばさみ等をベンチの外に持っていかない。つまり、「禁止」という言葉を使わずに、子ども達が「ベンチの外に持っていくのをやめておこう」という気持ちになったと考えられる。

### 2. テラスがある環境によるナッジ理論

図10に示すように、園庭と保育室の境にゴムチップ舗装によるテラスを設置している。設置当時はテラスでも靴を履いたまま遊ぶ子どもが多く、その都度保育者が声掛けをしていた。そこでテラスと園庭の間にゴムマットでもう一層「半テラス(図11)」層を作ることにした。そのことによって、子どもが自然と下靴を履いて遊べるエリアと、靴を脱いで遊べるエリアの境界線がわかるようにした。図12では裸足の子どもがテラスと半テラスを行き来して遊んで



図5. 園庭で火を使った活動



図6. ベンチを運ぶ子ども



図7. ベンチを使って遊ぶ子ども





図 8. たき火をする子ども



図 9. 焼き芋を作る子ども



図 10. ゴムチップ舗装によるテラス



図 11. 半テラスの環境

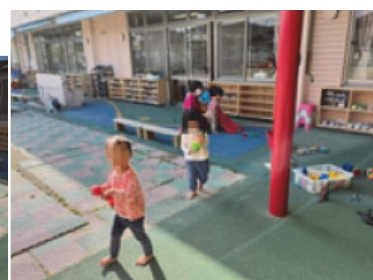


図 12. 裸足の子どもが遊ぶ様子

注) テラス：靴下 or 裸足、半テラス：外靴・靴下・裸足どれでも可、園庭：外靴

図 5－図 12 は第 2 筆者による提供

いる。子ども達が、なんとなく選択して行動してしまうしかけとしてのテラスが存在し、ナッジ理論を活用した魅力的な方法であると言える。

### Ⅲ. 方法

#### 1. 研究協力者

近畿圏の A 大学・B 大学で幼児教育・保育を学ぶ保育実習前後の大学生を本研究の研究協力者とした。

#### 2. データ収集方法

筆者らの「幼児理解論」及び「子どもと人間関係」の授業内で、「アンケート調査に協力し

ても良い」と回答した A 大学 (57 名)・B 大学 (51 名) の 2 年次生 108 名に依頼し、文章完成法 (SCT: Sentence Completion Test) を用いてデータを収集した。

#### 3. 調査時期

調査期間は、2022 年 12 月 1 日～2023 年 1 月 28 日であった。

#### 4. 調査内容

調査用紙の内容は、自由記述から成る。SCT を援用した自由記述への回答を求めた。具体的には、学生が捉えるナッジ理論を活用した保育の環境を多角的に分析するため、学生に「保育

者が子ども達の行動を促すナッジ」という短文を刺激として提示し、後に続く後半の文章を自由に連想し、回答欄への記入を求めた。

## 5. 分析方法

テキストマイニングのためのフリーソフトウェア KH Coder (Ver3) (樋口, 2014)<sup>13)</sup> を援用して分析し、抽出語の共起ネットワーク図を作成した。解釈の妥当性は、教育学を学び保育者である第1筆者、教育学を学び社会福祉士の第3筆者の計2名によって繰り返し検討を行った。

## 6. 倫理的配慮

アンケート調査にあたって最初に研究目的と内容の書面を示して研究協力者に口頭で説明した。また、回答の途中であっても参加を中止することができること、書面で明示した目的以外で使用しないこと、データの管理は鍵がかかる戸棚でファイルに綴じ、他の人が見えないように管理し、終了後はシュレッターにかけて廃棄する等について研究協力者に説明し、同意を得た。また、実施に関わる配慮等は、一般社団法人日本保育学会倫理ガイドブック改訂委員会(2023)<sup>14)</sup> の倫理基準に準じた。

# IV. 結果と考察

本研究では、学生が捉えるナッジ理論を活用した保育の環境について検討した。

## 1. KH Coder による学生の自由記述の量的検討

まず、学生が捉える「保育者が子ども達の行動を促すナッジ理論」に関わる特徴と保育実習前後の変化を分析するため、出現回数10以上を目安に「共起ネットワーク」による検討を行った。図13には、保育実習前及び保育実習後の

ナッジ理論に関する主要抽出語の共起ネットワークを示した。共起ネットワークでは、保育実習前及び保育実習後のナッジ理論に関する共通語が中央付近に布置され、左右には、保育実習前及び保育実習後ごとの特徴語が示されている。また、その語を結ぶ線の太さは、共起関係の強さを反映している。表1には、保育実習前及び保育実習後ごとの特徴語と出現回数を示した。

保育実習前の学生が捉えるナッジ理論に関する連想図では、「行動」「保育」「促す」「子ども」との共起関係が強く、特徴語として「選択」「強制」等が示された。保育実習前のナッジ理論に関する典型例は、「命令や強制によって相手を行動させるのではなく、自らが選択するように、それとなく伝える方が自身から行動しやすいという性質に基づいている」であった。総じて保育実習前の学生が考えるナッジ理論は、一部の園でアルバイト経験をしている学生を除いて、「子どもと人間関係」等の授業内で学んだ表層的な表現に留まり、具体的な保育の実践例に乏しいことが示された。

一方、保育実習後の学生が捉えるナッジ理論に関する連想図では、「子ども」「保育」「行動」「促す」との共起関係が強く、特徴語として「自分」「声」「感じる」「大切」「環境」「自然」が示された。保育実習後のナッジ理論に関する典型例は、「子ども達が自分で考えて行動する力を身に付けることができる。ナッジ理論として扱われているマークを子ども達が見て、…(後略)」であった。総じて保育実習後の学生が考えるナッジ理論は、保育現場においてナッジ理論を活用し、目的を持って子ども達が過ごす保育室の環境を整えていくことが大切であるという考えが強くなっていた。また当初筆者らが期待した「人間関係」の抽出語は現われなかったが、保育実習前及び保育実習後に見られた学

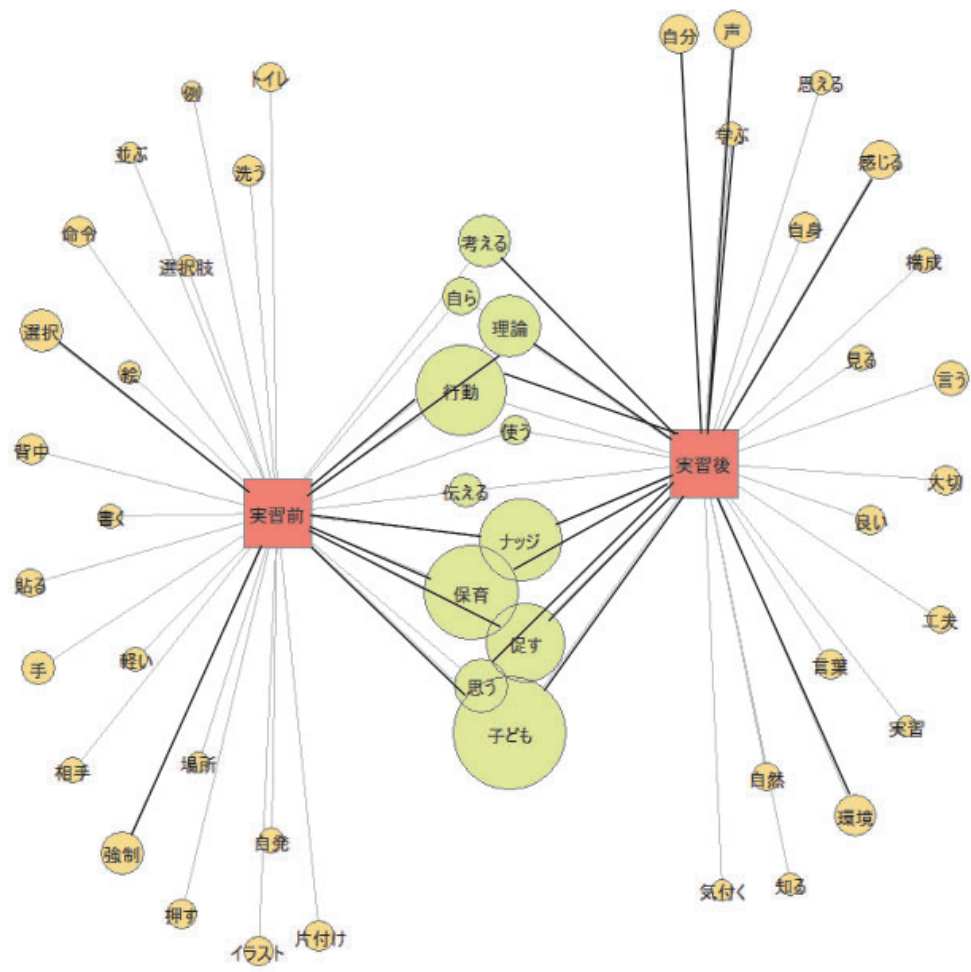


図 13. 保育実習前及び保育実習後のナッジ理論に関する主要抽出語の共起ネットワーク

表 1. 保育実習前及び保育実習後ごとの特徴語と出現回数

保育実習前		保育実習後	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	129	子ども	215
行動	98	保育	148
保育	92	行動	121
促す	86	ナッジ	103
ナッジ	77	促す	78
理論	40	理論	64
強制	32	考える	56
選択	29	思う	55
トイレ	20	声	34
思う	19	環境	32

生の考え方の変化は、実際に子どもと関わる保育者の言動からの学びであったと考えられる。特に、様々な場面における保育者の子どもへの声掛けの仕方は、学生にとって「保育実習で学びたい課題」の上位に常に上がるポイントで、ナッジ理論の「相手に命令や強制をせずにそっと誘導する…」に、保育者の姿を重ね合わせたことであろう。表1に見られる実習後の頻出語句に「声」「環境」があることも注目点である。同時に、理論としては理解していても、実際に子ども主導の遊びの中で、保育者の果たす役割の難しさも実習では見えたと思われる。そんな時に「環境設定」こそが、保育者の最大の武器であり、その「環境」を設定するのもまた保育者の役割であることを学んだに違いない。

また表1では、保育実習前に抽出されなかった「環境」という言葉が、保育実習後に32回抽出された。このことは、保育実習後の学生は、「強制」すること無く「保育の環境」を設定することで子ども達と接する保育者の姿を思い出すことによって、ナッジ理論を捉えたのではないだろうか。これらの結果から、全く関係が無いように見える「保育学」と「行動経済学」は、人の心に働きかけるといった心理的な要素が共通していることが明らかになった。

## 2. 保育実習後における学生が学んだナッジ理論と保育の環境作り

前述の調査結果において、保育実習後の学生からは保育者が準備する「環境」とナッジ理論は共通する点が見出される結果となった。それを踏まえて、学生には領域「健康」の教科書から、保育の工夫に関する環境作りの事例1・事例2を提示した。

### 【事例1】キャラクターのイメージにのせて動く（3歳児クラス 9月）

気候もよくなり、戸外に出て遊ぶ子どもも増えてきた。走ることや、ちょっとした高さの登り降りは、いろいろな遊びのなかで経験できている。そこで、跳ぶ動きを取り入れられないかと考え、簡単なハードルをつくる。（中略）また。悪者と戦うイメージで、遊びながら動くことができるよう、ハードルに悪者のキャラクターをつけて使うことにした。



（無藤・倉持, 2018<sup>15</sup>）より引用）

ハードルに悪者のキャラクターをつけることによって、「悪者をやっつけよう！」という気持ち自然と芽生え、「跳ぶ」動きを繰り返し挑戦する。簡単な仕掛けであるが、頑張ろうという気持ちをそっと後押しする「ナッジ理論」的な環境となった。

### 【事例2】鬼の玉入れ（3歳児クラス 1月～2月）

（前略）ちょうどそのころ、ボールの活動は行き詰まっていた。もって動くことや、転がすことは十分くり返してきた。最近では、室内のボールをわざと外に転がしてみたり、誰かにぶつけたりしている。ボールの遊びを切り上げて、環境からなくすことも一案だったが、新たな使い方を提示して様子を見てからでも…（中略）…大きな段ボール箱を調達し、子どもの背より大きく、口の穴のある鬼を保育者が製作した。大きな鬼を見ると「なにー、これ!」「鬼ヶ島の鬼なの?」と子ども達は喜んで





近づいてくる。「鬼に豆、食べさせちゃおう」と保育者がボールを投げ入れると「やるー!」「次、ほくだよ」と、口をねらって投げ入れようとする動きが広がっていった。

(無藤・倉持, 2018<sup>16)</sup> より引用)

ボール遊びに飽きてきていた子ども達は、わざと外へボールを出してみたり、友達の方に向かって投げてみたりし始めた。保育者は、そっと背中を押して、もう一度遊びを活発にして、子ども達に新たな動きを経験して欲しい、という願いを込めて、段ボールの「鬼」という環境を製作した。その結果保育者が期待した通り、新しいボール遊びに夢中になった事例である。子ども達の体格から、少し背伸びが必要な位置に鬼の口を設置したので、必死に背伸びして頑張る姿が見られる。これも、「友だちにおつけないで、箱の穴に入れる」という行動に誘導した「ナッジ理論」の利用である。

### 3. 保育実習後における学生が学んだナッジ理論と人間関係

保育実習終了後で「ナッジ理論」授業を受講した学生に「〇〇しよう」という強制に近い言葉を使わずに、「子どもの心に働きかけるような、ポスターを考えてみよう」という取組みをしてみた。通常、園舎内に貼ったポスターは、「くつを脱いだら揃えよう」とか、「遊んだ後はおもちゃを片付けよう」と、命令口調ではないが、やるべきことを指示する標語になっている場合が多い。環境として貼られたポスターとは、それだけで、そっと背中を押す物であることは間違いないが、もう一步「ナッジ理論」に踏み込んだ言葉を選んでみようという課題とした。その結果以下のような作品ができた。何れも授業内の学生の作品である(図 14、図 15、図 16、図 17)。

掲示物である「ポスター(図 14、図 15、図

16、図 17)」は、子どもの目につく場所に貼られている。それは、子ども達の行動を促す「環境」である。しかし、それによって「社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける」<sup>17)</sup>ことに寄与しており、領域「人間関係」のねらいに合致する。また、保育所保育指針「人間関係(イ)内容②自分で考え、自分で行動する。①友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気づき、守ろうとする。②共同の遊具や用具を大切にし、皆で使う」<sup>18)</sup>等、ポスターは人の心に働きかける。

このポスターを紹介した後の実習後の学生アンケートの記述に、「ナッジ理論を用いたポスターの例を見て、『なかよし』『えがお』等、肯定的な言葉のみで行動を促しているのがとても素敵だなと思いました。」とあるように、人を思いやる優しさ、信頼関係や尊重が重要になってくる。学生が考えた「ナッジ理論を利用したポスター」は、直接的な表現で書かれたポスターより、子どもに「何をすればよいのか」について考える十分な時間が必要となるかもしれない。子どもが自分で考え、選んで行動する。保育者は、育っていく子ども達を見守りながら、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿へと誘導していく。そっと後ろから鼻で子象の背中を突つつく親象(図 1) のようである。

## V. 総合考察と今後の課題

本論では、学生が授業で学んだナッジ理論を保育の環境でいかに活かせるか思考したことを明らかにした。その結果、保育実習前後の学生が捉えるナッジ理論に違いが示され、保育実習前に「強制」という言葉が抽出されたが、保育実習後には「環境」という言葉が抽出された。このことは、保育実習前の学生は、授業の中で「保育は強制してはいけない」という学びとナッ



図 14. 「遊んだあとは手を洗おう」では無く  
「ばいきんに注目」

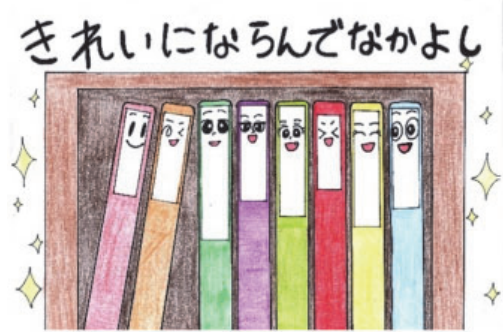


図 15. 「読んだあとは本棚にいれよう」では無く  
「仲良しの友達のように」



図 16. 「脱いだらならべよう」では無く  
「靴の気持ちに寄り添って考えてみる」

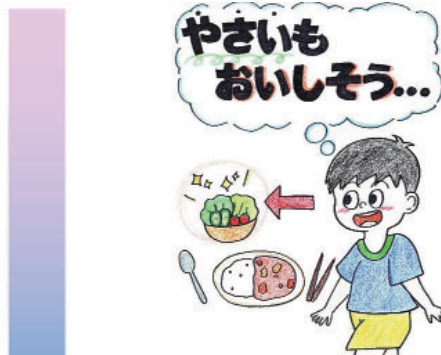


図 17. 「何でも残さず食べよう」では無く  
「客観的に野菜を評価し誘う」

注) 図 14－図 17 は第 1 筆者による提供

ジ理論を強く結びつけており、保育実習後の学生（例：資料 1 学生 C）は、「強制」すること無く「保育の環境」を設定することで子ども達と接する保育者の姿を思い出すことによって、ナッジ理論を捉えたのではないだろうか。実習後の学生はアンケートの記述の中で次のように述べている。「（前略）…保育者はこうした彼らの背中をそっと押すような「環境の場」「声掛け」「支援」等、選択の機会を取り入れる必要がある。また、視点を切り替えることも重要である。問題行動をする子どもがいた時、止める視点と共に、その子が自身の行動についてどのように選択できるかという視点を合わせ、関わることも保育でのナッジではと思う」。この学生（例：

資料 1 学生 E）は、ナッジ理論の学びを通じて、あるべき保育者の姿について、より深く考察をした。つまり、本研究によって、ナッジ理論に対する学生の受け止め方が明確になってきたと言える。

ここまで、「ナッジ理論」を「保育」に、どのように利用していくことができるのかその考え方の似ている所を見てきた。もちろん、行動経済学としての「ナッジ理論」と保育の中での「環境」を準備することは根本的に目指すところが違う。保育は 1989 年に『幼稚園教育要領』<sup>19)</sup>が改訂され 5 領域に再構成された時から、子ども達の自主性や自発性を重んじてきた。保

育者は、指導者であるより環境の構成者であり、保育者自身も重要な環境の一つである。また保育者養成の中で、遊びの中で学ぶことの大切さと遊びの「環境」を設置する難しさと楽しさを学生に伝えることの困難さに限界を感じる中、第1筆者が出会った「ナッジ理論」であった。まったく違う切り口から入ることで、学生は大変興味深く「保育の環境」や「環境を設定する保育者の役目」そして「領域 人間関係」との繋がりを理解したように思われる。

今後の課題は、KH Coder 以外の方法を創意工夫し、十分なデータ数を収集し、ナッジ理論を活用した「保育の環境」に関して改めて検証し、どのようなナッジ理論の援用や応用が子どもの側に立った保育の環境に繋がっているのか明らかにし、その結果を保育者養成に還元することである。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省：『保育所保育指針』，6頁，フレーベル館，2017年。
- 2) 前掲書・厚生労働省(1)，24頁。
- 3) Thaler, R.H. & C.R. Sunstein. (2003): Libertarian paternalism. *American Economic Review*, 93 (2), pp.175-179.
- 4) 森谷満：「新しい時代の「保健医療の行動科学再考」—医師の視点からみた社会的アプローチ—社会的処方とナッジ理論」，『日本保健医療行動科学会』37(1)，14-18頁，2022年。
- 5) 水野篤・野出孝一：「ナッジ理論を用いた循環器疾患予防とは？」，『医学のあゆみ』283(14)，1380-1385頁，2022年。
- 6) 小池智子：「ナッジ理論を感染対策に活用するために」，『ICT・ASTのための医療関連感染対策の総合専門誌』32(2)，182-187頁，2023年。
- 7) 出口加奈子・井上花音・三宅直子・島村真琴・小林牧・梶原知博・芦田顕彦・小寺正樹：「効果的かつ効率化・省力化を目指した HACCP 導入支援の

取り組みについて—ナッジ理論と自作動画の活用—」，『食品衛生研究』71(8)，43-48頁，2021年。

- 8) 佐々木健太「AIとナッジ理論に基づくエネマネサービス「エナッジ2.0」」，『環境工学研究』356，13-17頁，2021年。
- 9) 上原貴：「「ナッジ理論」を活用した効率的な職業能力開発の考察」，『実践教育ジャーナル』36(4)，15-18頁，2021年。
- 10) 木村 隆大・武藤敦子・森山甲一・松井藤五郎・犬塚信博：「ナッジ理論を用いたコミュニティ活動活性化モデル」，『情報処理学会論文誌数理モデル化と応用(TOM)』15(1)，1-9頁，2022年。
- 11) 厚生労働省：「明日から使える ナッジ理論」，『受診率向上施策ハンドブック(第3版)』，2023年。
- 12) Thaler, Richard H. & Sunstein, Cass R. (2009): *Nudge : Improving Decisions About Health, Wealth, and Happiness*, Penguin Books.
- 13) 樋口耕一：『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して』，ナカニシヤ出版，2014年。
- 14) 一般社団法人日本保育学会倫理ガイドブック改訂委員会 / 編：『保育学研究倫理ガイドブック2023』，一般社団法人日本保育学会，2023年。
- 15) 無藤隆・倉持清美 / 編：「事例で学ぶ保育内容「領域健康」」，138頁，萌文書林，2018年。
- 16) 無藤隆・倉持清美・前掲書(15)，139頁。
- 17) 厚生労働省：『保育所保育指針解説』，204頁，フレーベル館，2018年。
- 18) 厚生労働省・前掲書(17)，206-216頁。
- 19) 文部省：『幼稚園教育要領』，大蔵省印刷局，1989年。

## 参考文献

- ・リチャード セイラー・キャス サンステーン / 著，遠藤真美 / 訳：『実践行動経済学』，日経 BP，2009年。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、アンケート調査に快く協力してくださいました学生の皆様と、事

例を提供くださいましたS 保育所の子ども達と先生方に心より感謝申し上げます。

#### 資料 1. 保育実習前及び保育実習後におけるナッジ理論に関わる記述例

---

##### < 保育実習前 >

- 学生 C：「保育者が子ども達の行動を促すナッジ理論とは、子どもが自発的に物事に取り組めるように保育者が環境構成を行い子どものよりよい選択を促すもの。保育者が子どもに何かを「強制」すること無く、あくまで子どもの自発性が重要である。ナッジ理論は子どもの保育を行う上で有効であるが、それを行うための環境を構成するのはすごく大変なのではないかと思います。ぜひ、ナッジ理論を保育に取り入れてみたいと思います。」
- 学生 D：「保育者が子ども達の行動を促すナッジ理論とは、象の親が子の背中を押して方向を誘導するように、より良い方向で進んでいけるようにアプローチすることである。人の思考は大きく2つに分けることができ、それは直感的思考と論理的思考である。直感的思考は本能的・感情的で、マルチタスク対応で疲れないという特徴がある。また論理的思考は理性的・客観的で、シングルタスク対応、疲労感・負担感を感じるという特徴がある。」

##### < 保育実習後 >

- 学生 E：「保育者が子ども達の行動を促すナッジとは、子ども自身がやってみる、やろうとする気持ち大きくなる関わりである。保育者が子どものためにと、あれをしましょう、これはダメです…等と声を掛けることとは区別される。なぜならそこに子どもの意思決定のプロセスはないからだ。自分でこれはどうなんだろう？と考え行動を選択することにより自分から成長発達に進んでいく。保育者はこうした彼らの背中をそっと押すような「環境の場」「声掛け」「支援」等、選択の機会を取り入れる必要がある。また、視点を切り替えることも重要である。問題行動をする子どもがいた時、止める視点と共に、その子が自身の行動についてどのように選択できるかという視点を合わせ、関わることも保育でのナッジではと思う。」
- 学生 F：「保育者が子ども達の行動を促すナッジ理論として思い浮かべるものがある。それはトイレのスリッパを置く印である。今回の学習で学んだような「こちらでおまちください」のマークのような足の印が、実習先の園では貼られていた。子ども達はそれを見て、保育者から言われなくても、トイレをした後定位置にスリッパを戻すようにしていた。またバラバラにスリッパが置かれていても、このマークを目印に、保育者が声を掛けることで子どもは自らスリッパを並べられるようになっていた。他にも、乳児クラスにて移動の際、等間隔で電車シール床に貼られていたことがある。移動するときは、「〇〇列車まで行こう」と保育者が言うことで子どもは自然とその印の上まで歩いて行っていた。子どもの主体性を育むためにもナッジ理論をたくさん活用して環境を構成する事が大切だと感じた。」

---

注) 本資料では、「保育者が子ども達の行動を促すナッジ」の刺激文を補足している。



*Abstract*

## Childcare environment and human relationships utilizing nudge theory as perceived by students planning to work in the childcare field

Yumi GOTO <sup>1)</sup> Naoya YAMAGUCHI <sup>2)</sup> Hiroko OHMORI <sup>3)</sup>

This study clarifies how aspiring students who plan to work in the childcare field (hereafter, students) understand classroom taught nudge theory and its application towards the childcare environment and human relationships. In particular, we collected data using the sentence completion method (SCT) and used free software KH Coder for text mining to analyze how students perceived nudge theory before and after the students' childcare practice. The data indicates there are differences in the perception of nudge theory before and after the students' childcare practice. For instance, the word "compulsion" was detected 32 times before their childcare practice, but was not detected after the students' childcare practice. Furthermore, the word "environment" was detected 32 times after the students' childcare practice. After the students' childcare practice, they apparently understood nudge theory by remembering the childcare workers who created the "environment" without using "compulsion". These results suggest that "childcare studies" and "behavioral economics," which appear to be completely unrelated, share the psychological element of manipulating human minds. In addition, we examined human relationships utilizing nudge theory by analyzing posters created by the students who learned nudge theory. One remaining task is to utilize these analysis results in the training of childcare workers.

Keywords: nudge theory, students who plan to work in the childcare field, childcare environment, human relationships.

---

<sup>1)</sup> Higashiosaka Junior college   <sup>2)</sup> Seikadai nursery school   <sup>3)</sup> Faculty of Child Education